

発達障害がある子ども／人への 災害時の支援について

東北医科薬科大学
福地 成

長いこと発達障害がある人たちの支援に取り組んできましたが、恥ずかしながら、あのような出来事が起きたとき、みなさんの避難生活がどうなるのか想像したこともありませんでした。一九九五年の阪神淡路大震災以降、「心のケア」という言葉は広く使われるようになり、私たちはいろいろ準備をしていたはずでした。しかし、二〇一一年の東日本大震災のとき、発達障害がある人たちへの支援はまだ確立されておらず、いわば手探り

の人にとっては、避難所に響く騒音は不快であり、布団を一日中かぶって過ごすようなお子さんにも出会いました。また、食べ物が不足するなかで配給される食事には限りがあり、味覚過敏のために食べ物の好き嫌いが強い子どもにはさぞ苦しかったに違いありません。ハンガーストライキのように、数日間にわたり何も食べないで過ごす子どもにも出会いました。ルール変更への対応も難しかったと思います。コミュニケーションが苦手な人

を強く守ろうとしたり、持ち物を確認したりするようになりました。周りからは「こだわりが強くなった」と感じられ、どう対処したらいいのか相談を受けることも多くありました。

宮城県立石巻支援学校では、在籍していた子どもたちの状況を調査しました。その報告では、震災から約三ヵ月後の時点で一般の避難所を使っていた在籍生徒は約一五％程度しかいなかったと報告しています。何らかの障害がある子どもにとって、避難所はとても過ごしづらい環境であったことが想像されます。発達障害がある人は普段と異なる環境で不安を抱きやすいため、私たちは少しでも安心して過ごせるような避難所づくりを考えていく必要があります。いまだ議論の余地は多いものの、地域の特別支援学校を障害がある人のための福祉避難所に指定していく案があります。普段から外からの支援者を受け入れる体制を整えておき、緊急時には障害がある人の避難生活を支える拠点を作ることができるようになる必要があると思います。

のなかで支援が展開されました。

避難所や仮設住宅を巡回するなかで、いろいろ気が付いたことがあります。おそらく、避難生活のなかで、みなさんが一番苦しんだのは「感覚の過敏」だと思います。普段の生活ではさまざまな工夫をすることによって、いろいろな刺激を避けたり、和らげたりしています。しかし、避難生活では容赦なく、五感に強い刺激が侵入し、不快な感覚にさらされることになりました。特に聴覚過敏があ

は、人間関係のなかである程度のテンプレイトに基づいて行動していることがよくあります。避難生活は今までに経験したことのない場面であり、対応できる手持ちのテンプレイトがありませんでした。つまり、避難生活ならではのルールを新しくおぼえる必要があります。このような混乱した状況が続くと、気持ちの安定を求めて、自分でコントロールができる身の回りの「こと」「もの」にこだわるようになります。自分のルーチン

ふくちなる ◆ 弘前大学医学部卒、東北大学大学院医学系研究科 修了。専門は児童精神医学、災害精神保健。みやぎ心のケアセンターなどを経て、二〇二二年より現職。